

〔研究報告〕

統合失調症の闘病記の分析

—古川奈都子『心を病むってどういうこと? : 精神病の体験者より』
の構造のテキストマイニング—

A Text Mining Analysis of an Autobiographical Illness Narrative Book

—“*What is the Meaning of Mental Disease?:
The Experience of a Patient with Mental Illness*”

Written by Natsuko Furukawa—

小平朋江¹⁾ いとうたけひこ²⁾ 大高庸平³⁾
Tomoe Kodaira Takehiko Ito Yohei Ohtaka

(Abstract)

Autobiographical illness narratives are expected to be used as educational materials for nursing education. The aim of the present study was to reach deeper understanding of people with mental illness through analysis of the structure of the story of an autobiographical illness narrative book “*What is the meaning of mental disease?: The experience of a patient with mental illness*” written by Natsuko Furukawa. The body text was analyzed by the text mining technique and by the individual analysis method of autobiography. The results indicated that the text consisted not only of the author’s personal experience but also of positive and concrete messages of expectation and hope for the surrounding people and the general society. This kind of integration of experiential story and positive social message ought to have impact for readers to better understand people with mental illness by reducing prejudice and taking in information to get along with them. This sort of autobiographical mentally illness narratives are to be utilized for education in the area of psychiatric and mental health nursing.

キーワード：闘病記, ナラティブ教材, テキストマイニング, 伝記分析, 統合失調症

Key words : autobiographical illness narratives, narrative educational materials, text mining, autobiography analysis, schizophrenia

¹⁾ 聖隷クリストファー大学看護学部 School of Nursing, Seirei Christopher University

²⁾ 和光大学心理教育学科 Department of Psychology and Education, Wako University

³⁾ 和光大学大学院社会文化総合研究科 Graduate School of Social and Cultural Studies, Wako University

(要 約)

闘病記は当事者のナラティブであり、看護学の教材としての利用が期待される。本研究の目的は、ある統合失調症当事者が書いた闘病記の構造を明らかにし、その内容をより深く考察することにある。古川奈都子『心を病むってどういうこと？：精神病の体験者より』を対象に、テキストマイニングと伝記分析の個別分析の手法により分析を行った。各章ごとの特徴を見ることにより、自分の体験の告白だけでなく、周囲の人や、一般社会に対して理解を求めるポジティブで具体的なメッセージがあることが確認された。本書のような、体験者の物語りと積極的な意見が統合されているような闘病記は、当事者や家族だけでなく広く一般の人々にも偏見をなくしたり、当事者との付き合い方を知るという教育効果がある。このような闘病記はナラティブ教材として、間接的に当事者の体験や生きる姿を知ることにより、精神看護学の教育に有効に活用されるべきであることが示唆された。

I 緒 言

Kleinman (1988) は、「慢性の患者は、自分の病いについての専門家である（あるいは専門家になることができるようになる）。さらに、自分の疾患の手当をするための多少の専門的な技能を身につけることもできる。ビデオテープや文書教材を、特にこの目的のために用意することもできるだろう。」(p. 343) と述べ、また医学教育においては、「学生の経験は、患者の世界から生まれた伝記やフィクションを読むことによって豊かなものにするができる。」(p. 338) と、当事者によるナラティブを重視している。

いとう他 (2010) や Barker & Buchanan-Barker (2010) の指摘のように、浦河べてるの家の援助論や精神看護学におけるタイダルモデルなどの新しいアプローチでは、当事者の紡ぐナラティブに注目している。

小平・伊藤 (2009)、小平・いとう (2010ab) は、当事者の知恵が豊かに含まれるナラティブは、看護学などの教材として活用できることを提案し、そのような教材を「ナラティブ教材」と命名したうえで、「患者の病いの体験を患者や家族などが自ら自分のことばで語った物語りが表現された作品であり、学習者にとってその体験の理解を促進したり、助けになる目的で看護教育などに利用されうる形に教材化されたもの」と定義した。そして、このようなナラティブ教材は闘病記をはじめコミックエッセイ、録画されたTV番組、JPOP-VOICEなどのウェブサイトなど、メディアの種類によって七つに分類されるのではないかと考えられ

た。そのうちの文章で記述された「闘病記」のジャンルで、統合失調症の闘病記においては代表的ともいえる作品である古川 (2001) を本研究で取り上げる。著者は企業教育研究会 (2008) の偏見低減教育にも協力している著名な当事者である。

古川 (2001) の「寛解」についての記述は、科学とナラティブの関係を考えるうえで興味深い。「寛解」は国立国語研究所の市民アンケートによる患者がわかりづらい医師の言葉100語の中のひとつである (朝日新聞 朝刊 2008年7月8日)。論理-科学的様式 (Bruner, 1996, p. 52.) である精神医学事典 (弘文堂) によれば (永田, 2001), 「陽性症状が消失し、安定した病像が見られれば『寛解』という」とされている。しかしながら、物語的様式 (Bruner, 1996) で語っている古川 (2001) によれば、「精神病には、完全に治った状態ではなく、発病前のようにもどるのではなく、発病前とは全く違う別の状態で、なんとか社会生活が営める状態になることを『寛解』という言葉で言うことができる。(中略)『寛解』したとは、自分自身が大きく成長した、飛躍したことです。」(pp. 12-13) と記述している。このように古川は、難解な「寛解」という用語について、病いの体験を踏まえたくて鮮やかに述べている。

看護学や看護教育の分野で闘病記や手記を用いる実践は、病気について知りたいと思っている当事者だけでなく、援助者である看護師にとっても、看護を学ぶ学生にとっても、そして看護学教育に携わる看

護教員にとっても、貴重な資料を提供してくれ、当事者と援助者が、ともに学びを得られるものである（山口・和田，2008/2009）。和田が、その設立に深くかかわっている「健康と病いの語り」データベースの活動で知られる英国DIPEX (Database of Individual Patient Experiences) の日本版に取り組むDIPEX-Japan (<http://www.dipex-j.org>) が、がん患者の語りを公開したことはNHKのニュースでも紹介され、看護学生などの教育における活用にも取り組みを開始した（和田，2010）。また、門林（2005）は、がん患者やその家族の多数の闘病記を分析して、がんと診断されたときの本人に対する「告知」の意味が、死の宣告（門林の表記では「猜疑心・がん＝死」）、衝撃・苦悩、総力戦・闘う姿勢、共生共存・関わらない生き方と、時代とともに変遷し、闘病記の内容もそのように変化していくことを明らかにした。

精神科医師の八木（2009）は、最近の闘病記への関心の高まりに触れ、「精神医学がこのことに無関心であってはなるまいし、精神病理学の基本は当事者の語りから出発するべきである」と述べ、闘病記の精神医学における根源的な重要性を指摘している。

斎藤（2003）は、ナラティブの最も一般的な定義として「あるできごとについての記述を、何らかの意味のある連関によりつなぎ合わせたもの」と述べ、「ナラティブという用語は物語の内容というよりは、語り手自体も完全には気づいていない【物語の構造】を意味する」とした。看護学教育および看護師の知識創造にとって闘病記の意義が大きいとして、ナラティブ教材としての闘病記の有用性を強調した小平・いとう（2010ab）を受け、本研究では統合失調症の当事者による代表的な闘病記である古川（2001）を取り上げ、病いの体験と語りの構造を明らかにし、精神看護学と看護援助への示唆を得るものである。

II 目 的

企業教育研究会（2008）が精神障害のアンチスティグマ研究会（代表世話人：佐藤光源）とも連携して「こころの病気を学ぶ授業」の開発に取り組んでいる。古川奈都子の2001年の著書である『心を病むってどういうこと？：精神病の体験者より』は、この授業の指導案・教材の中でも紹介されており、優れた闘病記で

あるといえる。本研究では、テキストマイニングの手法を用いて、その構造を量的に分析することにより、本書における病いの語りの構造を質的分析ではなく量的な根拠に基づいて明らかにすることを目的とする。

III 方 法

1. 分析対象

古川奈都子（2001）『心を病むってどういうこと？：精神病の体験者より』ぶどう社。

2. 分析手順

量的分析の方法として、本研究はテキストマイニングを用いた。テキストマイニングとは、いわば対象としたテキスト（鉱山）からマイニング（発掘）を行い、鉱石を見つけ出すことであり、つまりはテキストから知見の発掘を量的に試みるものである。テキストに関する分析は、これまで質的に分析を試みるものが多かった。しかしながら、本研究で用いるテキストマイニングは、ITおよびコンピューターの発達によって分析が可能となった新しい分析手法である。金（2009）や小平ら（2007）によれば、テキストマイニングという手法は、文字（テキスト）という質的データを、多変量解析なども用いた量的方法で分析する手法であり、質的なテキストデータに基づいたうえで、統計的手法を用いる量的な分析である。また、本研究で用いたソフトウェアであるText Mining Studio（数理システム社）は、テキストマイニングによる量的な分析結果から質的データを参照できる機能（原文参照機能）を備えていることが特徴であり、量的結果と質的データを同時に参照できる。

質的分析は、西平（1996）によって示された伝記分析（伝記研究、伝記法、伝記的方法）である。生育史心理学研究の手法によるルーティンの中に、個人について個別的分析する「個別分析法」、その個人と類似した人物または対照的な人物とを比較する「比較伝記的方法」、そして、この二つの分析を進めるうちに、さらに深く入り込み、数人の人物に共通の心理的特性や心理学的な言葉（たとえばナルシシズムなど）に注目して分析する「テーマ分析」がある。

斎藤（2003）が述べたナラティブの定義と意味のように、物語がどのような構造を持つものであるかを明

らかにしておく必要がある。それにあたっては、テキストマイニングの手法はテキストの山から発掘（マイニング）を行うことで、図や表によって物語の構造を可視化できる、という点からも妥当であるという判断ができる。

本研究は、対象となる闘病記の内容や意味の質的分析（西平（1996）の個別分析法）を行うとともに、テキストの量的分析に、Text Mining Studio Ver. 3を用いた。Text Mining Studioでは単語頻度分析で出現回数、対応分析で各章と頻出単語との関係、特徴語分析で各章に特徴的な単語の抽出を行い、闘病記の構造と特徴を質的・量的に明らかにした。

3. 倫理的配慮

本書は一般に出版されている書籍であり、著作権に配慮した。

IV 結 果

1. 闘病記の内容の要約

闘病記の内容を要約すると、「はじめに」では「心の病を持つ人のことを知ってください」と題して、本書の執筆動機が精神分裂病（以下、統合失調症）を持つ人への理解をしてほしいことが述べられていた。第1章「私から、あなたへ」では、精神障害はさげすむものではなく、特別なことでもないということが「寛解」をキーワードに述べられている。第2章「病気になるてよかった」では著者自身の生育歴と発病経験、現在までの経過が紹介されていた。第3章「こんなふうにしてもらえたら」では、自分の経験を基盤に統合失調症を持つ人の弱さや苦勞の具体例と、それに対する対応の仕方について述べられていた。第4章「『あなた』と『私』の関係で」では、家族や周囲の人、さらには社会がどのように統合失調症の人々を考え、関係を取り結んでほしいかが述べられていた。「おわりに」の「『みんな、いっしょ』」ではお互いの違いを認めながらも、一人ひとりの人権を尊重することの重要性が述べられていた。「あとがき」ではこの本を書いた経過と、「病者として語ること」という義母のアドバイスによる（著者の）社会的役割の認識、人生を通してかかわった人々と生活を支え続けた家族に対する感謝が述べられていた。

2. 基本統計量

個別の分析の前に本書の全体的特徴を量的に示すために基本統計量を算出した。

表1は、テキストマイニングにおいて基本となる古川（2001）のテキスト情報量を基本統計量として示している。表1における総行数とは、各章における節の総数であり、平均行長は各節当たりの文字数の平均である。そして平均文長とは一文当たりの文字数となっており、総文数は句点（マル）等で区切られた文の総数である。また、延べ単語数とは、本書の記述における内容語についての総数であるとともに、記述における内容語の異なり語数を単語種別数として示している。単語種別数におけるカウントは、同一単語の出現がテキスト中に複数回見られたとしても一つとカウントした。

表1から各項目の基本統計量を見ると、まず全体として古川（2001）のテキストは60の節によって構成され、1,387（数）の文で成り立っているとともに、12,575（個）の述べ単語数と2,803種類の単語が見られていた。次に、各章および項目ごとに算出されたテキストの基本統計量を見ていく。「はじめに」では節の数は一つであり、17（数）の文で構成され、176（個）の述べ単語数とともに112種類の単語が含まれていた。第1章は七つの節があり、全体で188（数）の文で成り立つとともに1,783（数）の述べ単語数と671種類の単語が見られていた。次に第2章については、9の節で構成され、339（数）の文で成り立っているとともに2,481（個）の述べ単語数と1,016種類の単語があった。第3章は24の節で構成されており、他の章との比較において節数が最も多かった。24の節で構成された第3章は423（数）の文が見られ、4,216（数）の述べ単語数とともに1,384種類の単語が見られているなど、各章との比較においてもテキストの情報量が大きかった。そして、第4章は17の節で構成され、359（数）の文が見られるなかで述べ単語数は3,255（個）であり、1,172種類の単語が見られた。「おわりに」については、節の数は一つで、18（数）の文で構成され、155（個）の述べ単語数とともに91種類の単語が含まれていた。最後に、「あとがき」では一つの節のなかに、43（数）の文で成り立っており、509（個）の述べ単語数と276種類の単語が含まれていた。

表1 古川(2001)の各章や項目と全体によるテキストの情報量(基本統計量)

1-1 はじめに		1-2 第1章		1-3 第2章	
項目	値	項目	値	項目	値
総行数	1	総行数	7	総行数	9
平均行長(文字数)	374	平均行長(文字数)	587.6	平均行長(文字数)	633.3
総文数	17	総文数	188	総文数	339
平均文長(文字数)	22	平均文長(文字数)	21.9	平均文長(文字数)	16.8
述べ単語数	176	述べ単語数	1,783	述べ単語数	2,481
単語種別数	112	単語種別数	671	単語種別数	1,016
1-4 第3章		1-5 第4章		1-6 おわりに	
項目	値	項目	値	項目	値
総行数	24	総行数	17	総行数	1
平均行長(文字数)	421.5	平均行長(文字数)	459.8	平均行長(文字数)	374
総文数	423	総文数	359	総文数	18
平均文長(文字数)	23.9	平均文長(文字数)	21.8	平均文長(文字数)	20.8
述べ単語数	4,216	述べ単語数	3,255	述べ単語数	155
単語種別数	1,384	単語種別数	1,172	単語種別数	91
1-7 あとがき		1-8 全体			
項目	値	項目	値		
総行数	1	総行数	60		
平均行長(文字数)	1,218	平均行長(文字数)	495.2		
総文数	43	総文数	1,387		
平均文長(文字数)	28.3	平均文長(文字数)	21.4		
述べ単語数	509	述べ単語数	12,575		
単語種別数	276	単語種別数	2,803		

3. 単語頻度分析

本書全体と各章の叙述の特徴を裏づけることを目的に、各章ごとの単語頻度分析を行った。表2は、各章または項目ごとに頻出して見られる上位20件までの単語頻度を示している。

「はじめに」では「人」が15回出現しているが、「病気」「家族」「言葉」「話」「病者」「生きる」といった単語は出現しなかった。第1章は、「まわり」(11回)や「生きる」(10回)があらわれており、「人間」についても13回出現していたことがわかった。第2章では、「本人」と「病者」の単語は出現しておらず、「病気」が11回出現しており、章ごとの比較でいえば頻度が最も少なかった。しかし、「今」(28回)や「人間」(14回)については、第2章に最も多く出現している。第3章においては、「話」(35回)や「言う」(45回)、そして「考える」(18回)、さらには「自分」(125回)について各項目と比較した場合に最も多く出現してお

り、また「病者」も20回出現している。第4章では、「生きる」(23回)や「言葉」(21回)が最も多く出現し、「病気」(41回)や「病者」(24回)の単語も多く見られ、「家族」(31回)、そして「心」(18回)や「良い」(26回)といった単語も多く出現している。さらに第4章では、上位20単語すべてが1回以上出現していた。「おわりに」では、「人」が7回出現しており、「自分」と「病気」もそれぞれ6回ずつ出現している。「あとがき」では、「おわりに」と単語頻度数について共通した傾向が見られた。しかしながら、「あとがき」の単語頻度について「おわりに」と比較すると、「今」という単語は「おわりに」においてのみ見られ、反対に「家族」や「心」といった単語は、「あとがき」においてのみ見られているといった特徴があった。

4. 特徴語分析

表3は、澤木・萩田(1995)によって開発された補

表2 古川 (2001) における各章・項目ごとの単語頻度分析 (上位20件)

単語	品詞	はじめに	第1章	第2章	第3章	第4章	おわりに	あとがき	合計
人	名詞	15	75	57	126	107	7	10	397
自分	名詞	1	35	51	125	68	6	13	299
本人	名詞	1	22	0	98	31	0	0	152
病気	名詞	0	31	11	31	41	6	7	127
言う	動詞	2	9	26	45	19	0	0	101
今	名詞	2	15	28	11	15	3	0	74
家族	名詞	0	4	12	19	31	0	6	72
良い	形容詞	1	6	18	13	26	0	1	65
持つ	動詞	2	10	10	11	23	3	4	63
心	名詞	3	12	9	14	18	0	6	62
思う	動詞	1	9	11	16	16	5	3	61
言葉	名詞	0	14	10	15	21	0	0	60
よく	副詞	0	15	7	23	12	0	0	57
話	名詞	0	7	5	35	8	0	0	55
まわり	名詞	0	11	8	22	13	0	0	54
病者	名詞	0	7	0	20	24	0	1	52
いる	動詞	2	8	6	22	11	1	1	51
生きる	動詞	0	10	8	1	23	2	4	48
考える	動詞	1	6	3	18	14	0	3	45
人間	名詞	2	13	14	5	8	1	2	45

完類似度を指標値にして、各章ごとに算出された上位20件の特徴語を示している。

表3から、「はじめに」では、「優しい」「仲間」「人々」や「体験」など、同じ病いの仲間のことや体験を知ってほしいという表現が特徴的である。たとえば、「仲間」については「そして、私の仲間はみな、お人好しで、まじめで、優しすぎるくらい優しい人たちです。」と原文で述べられており、「体験」について原文参照を行うと「私は、自分がこの病を体験することによって、自分自身を変え、成長させることができるようになりました。」と語られていた。第1章では、「子」「病気」「障害」、そして「寛解」が特徴的であり、この章では寛解をキーワードに、過去を振り返り、現在を肯定している姿が描かれていた。第1章において特徴的にあらわれた「子」について原文参照を行うと、その前後において古川は子という単語を用いて、自身の子ども時代のエピソードを記述していた。いい子であると大人から評価・期待された子ども時代を経て、古川が経験した「障害」については「私は障害を持つことにより、多くのことを学び、日常にはできない肉体的に苦しむという経験をした。」と述べていることが原文から明らかになった。「寛解」については「緒言」のところで紹介したとおりである。

第2章では、「母」「町」「学校」「友人」「結婚」など生育歴に関する単語が特徴的であった。第3章では、「妄想」「身体」「幻聴」など、著者の身体に起こる他の人には理解しづらい体験についての単語が特徴的である。第4章では、「能力」「家族」「障害者」や「娘」「社会」などの単語があらわれており、家族や社会へのメッセージが特徴的であった。「おわりに」と「あとがき」では、「病気」「分裂病」「体験」など、病気と共に付き合うことについての思いがあり、「共感」「人達」「与える」といった著者の希望と夢が特徴である。

5. 対応分析と特徴語分析

図1は、各章において見られた頻出単語(上位20件)と章ごとの関係を、林(1993)の数量化Ⅲ類と同等の統計手法による対応分析にて示した。この分析によって、本書の中心となる頻出単語と各章ごとの関係性が明らかになるとともに、特徴語分析(表3)と併用することによって全体の構造が明らかになった。

図1から、第1章は「自分自身」や「障害」「いつ」「子ども」との距離が近いことがわかった。第1章においてのみ見られる単語は、「子」「精神病」「姿」であり、特徴語分析(表2)とともに第1章は、自分自身(著者)が過去を振り返り、そして現在を肯定する姿があっ

表3 古川 (2001) における各章と項目の特徴語 (上位20件)

はじめに					第1章					第2章				
単語	品詞	属性 頻度	全体 頻度	指標 値	単語	品詞	属性 頻度	全体 頻度	指標 値	単語	品詞	属性 頻度	全体 頻度	指標 値
人	名詞	15	400	86	人	名詞	76	400	57	今	名詞	28	74	34
病	名詞	7	16	60	子	名詞	19	41	38	評価	名詞	13	24	21
優しい	形容詞	4	5	35	姿	名詞	17	29	37	母	名詞	12	20	20
仲間	名詞	3	20	24	病気	名詞	32	136	37	町	名詞	10	10	20
人たち	名詞	3	24	24	障害	名詞	16	40	30	学校	名詞	10	11	20
心	名詞	3	62	19	合わせる	動詞	11	13	26	折り紙	名詞	9	10	18
ペース	名詞	2	2	17	いつ	名詞	14	36	26	書く	動詞	12	27	17
まじめ	名詞	2	6	17	子ども	名詞	14	37	25	嫌う	動詞	10	17	17
やる	動詞	2	10	16	精神病	名詞	12	28	23	人間	名詞	16	48	17
かかる	動詞	2	14	16	人間	名詞	14	48	21	友人	名詞	14	38	16
知る	動詞	2	18	15	よく	副詞	15	57	20	K	名詞	8	8	16
自分自身	名詞	2	26	15	言葉	名詞	15	62	18	行く	動詞	12	29	16
体験	名詞	2	35	14	できる	動詞	16	70	18	話す	動詞	11	24	16
人間	名詞	2	48	12	理解	名詞	9	23	17	悪口	名詞	9	14	16
いる	動詞	2	62	10	大人	名詞	8	16	17	少し	副詞	11	28	14
思う	動詞	2	73	9	治る	動詞	10	31	16	ただただ	副詞	8	13	14
持つ	動詞	2	73	9	自分自身	名詞	9	26	15	来る	動詞	7	8	14
今	名詞	2	74	9	以前	名詞	7	12	15	結婚	名詞	7	9	13
お人好し	名詞	1	1	9	寛解	名詞	6	6	15	言う	動詞	32	138	12
ハード	名詞	1	1	9	かかる	動詞	7	14	14	兄	名詞	6	6	12

第3章					第4章				
単語	品詞	属性 頻度	全体 頻度	指標 値	単語	品詞	属性 頻度	全体 頻度	指標 値
本人	名詞	99	153	99	能力	名詞	30	38	46
自分	名詞	125	300	48	がんばる	動詞	20	26	31
聞く	動詞	35	54	35	家族	名詞	31	72	29
話	名詞	35	57	33	生きる	動詞	25	53	26
言う	動詞	62	138	31	持つ	動詞	30	73	26
妄想	名詞	19	19	26	病者	名詞	24	52	24
約束	名詞	17	17	24	良い	形容詞	28	69	24
起こる	動詞	21	32	21	病気	名詞	43	136	19
わかる	動詞	31	63	20	責任	名詞	11	16	16
いる	動詞	30	62	19	娘	名詞	9	9	15
なぜ	副詞	20	33	18	障害者	名詞	12	22	15
身体	名詞	20	33	18	言葉	名詞	22	62	14
性格	名詞	13	15	17	社会	名詞	11	20	13
幻聴	名詞	14	19	16	人	名詞	108	400	12
考える	動詞	27	59	14	決して	副詞	9	14	12
辛い	形容詞	12	16	14	思う	動詞	24	73	12
訴える	動詞	10	12	12	援助	名詞	7	7	12
思い	名詞	17	33	12	与える	動詞	11	24	11
必要	名詞	17	33	12	規則	名詞	6	6	10
欲しい	形容詞	9	11	11	偏差値	名詞	6	7	10

おわりに					あとがき				
単語	品詞	属性 頻度	全体 頻度	指標 値	単語	品詞	属性 頻度	全体 頻度	指標 値
思う	動詞	7	73	55	本	名詞	12	14	59
病気	名詞	7	136	47	原稿	名詞	10	13	49
分裂病	名詞	5	24	42	読む	動詞	10	14	48
そう	副詞	5	39	40	書く	動詞	9	27	41
体験	名詞	4	35	32	希望	名詞	5	8	24
遊ぶ	動詞	3	16	25	方々	名詞	5	11	23
変わる	動詞	3	18	25	病	名詞	5	16	22
もう	副詞	3	20	25	与える	動詞	5	24	21
気持ち	名詞	3	45	22	人達	名詞	4	4	20
生きる	動詞	3	53	21	心	名詞	6	62	18
自分	名詞	6	300	20	家族	名詞	6	72	16
持つ	動詞	3	73	19	市毛さん	名詞	3	3	15
今	名詞	3	74	19	共感	名詞	3	7	14
それぞれ	名詞	2	2	18	体験	名詞	4	35	13
人	名詞	7	400	18	持つ	動詞	5	73	11
乗り越える	動詞	2	3	18	分裂病	名詞	3	24	11
きっと	副詞	2	6	17	ほどく	動詞	2	2	10
一人	名詞	2	17	16	ヒント	名詞	2	2	10
わかる	動詞	2	63	11	出版社	名詞	2	2	10
あな	名詞	1	1	9	付き合う	動詞	2	2	10

所のなさから考察すると、第4章は自分の存在の希薄さを乗り越えた社会への実在的なメッセージというかたちでの希望である。したがって第4章が中心に座り、すべての円(章)をつないでおり、これが本書のナラティブの構造であると考えられた。目次のつけ方を見ると、第1章は「私からあなたへ」という一方向的なメッセージであり、第2章「病気になれてよかった」は、世間の偏見や自己の苦しみを乗り越えていった、病気になった自分への高い自己評価(國方, 2009)の表明である。第3章は「こんなふうにしてもらえたら」というタイトルで、読者、特に当事者の周りの人々への願いを表し、第4章では、題目が「『あなた』と『私』の関係で」としているように、対等で双方向的な関係構築を目指す思いが表現されている。なお、「はじめに」「あとがき」、第2章が図1において近接しているのは、自己評価を保持しつつ病気についての理解を求めている内容が共通していると考えられる。第4章と「おわりに」が近いのは、未来へのメッセージという点で共通しているからである。「おわりに」の最後の部分には「一人一人の自分と違う考えを認め/違う人にも、それでいいよって/お互い受け入れ合おうよ/そう生きたい」と締めくくっているように、精神障害の有無を超えた多文化共生の思想が脈打っている。

2. ナラティブ教材としての古川(2001)の闘病記の有効性

本書は、第1章「私から、あなたへ」において「子」「病気」「障害」「寛解」などの言葉を用いて病いを語り、第2章「病気になれてよかった」において「母」「町」「学校」「友人」「結婚」などの語を用いて自身の生育歴を振り返っており、本人の苦しみの記述だけでなく、自分自身の歩みを振り返りながら病気とともに歩む自己を肯定的に語っている。さらに、第3章「こんなふうにしてもらえたら」において「妄想」「身体」「幻聴」など病状の体験を語り、第4章「『あなた』と『私』の関係で」において「能力」「家族」「障害者」「社会」などの単語を用いて家族など周囲の人や広く社会の理解を求めている記述により、非当事者の読者に当事者の苦勞を理解してほしいというメッセージにあふれていた。このような語りの内容は、看護学生の教育および看護

師の自己研鑽にとっても、ナラティブ教材として貴重である。闘病記は、当事者だけでなく環境側の問題も含めた「生きにくさ」の体験(武井, 2005, 2009ab)の実例が豊富であることが、本書の分析の結果における第2章の生育歴の記述や、第3章における心身の症状の記述や、第4章における周囲の人との対人関係の難しさの記述の分析から明らかになった。精神看護において、臨床場面での直接的ナラティブ体験とともに、闘病記を読むことを通して得られる看護の現場から離れた間接的なナラティブ体験の持つ意味が大きい。

このことを、中山(2004)の経験を知に変換する「知識創造」の図式において、図2のように闘病記を位置づけた。闘病記は患者の経験という点では、現実の範囲に入っているとはいえ、看護師にとっての直接的現実ではなく、間接的なナラティブ体験として位置づけることができると考えた。このような当事者という他者の物語的な経験を、看護師や看護学を学ぶ者が間接的に体験できるというナラティブ教材(小平・伊藤, 2009; 小平・いとう, 2010b)が持つ他の教材にない大きな特徴である。このような当事者の著書を読むことにより、ロールモデル(模範)を得ることができることが読者にとっての効果と考えられる。

武井(2009b, p. 23)は、森 実恵の闘病記(森, 2006)を引用しつつ精神病体験の苦痛を説明している。本書は、その生きにくさの体験の告白にとどまらず、理解を求め、偏見をなくすようにとの積極的なメッセージが込められていることも分析によって明らかになった。

國方(2009)は自己評価の高い統合失調症の当事者のQOLが高いことを先行研究から見いだしている。本研究での古川奈都子の場合も自己評価とQOLの高い生活をしていることがうかがえる。このような自己評価とQOLの高い要因として、家族の理解があったこと、パートナーに恵まれたこととともに、家族や仲間などの居場所(小平, 2003/2006)があることが大きい要因であるといえよう。「無条件でよい居場所」(広沢, 2006, pp. 166-168)の確保が重要なのである。このような当事者の回復過程は、中村(2008, 2010)のコミックエッセイや、ウェブサイトJPOP-VOICE (<http://jpop-voice.jp/>)の「統合失調症と向き合う」の語りからも見ることができる(孫ら, 2010)。

Interactive knowledge-creating

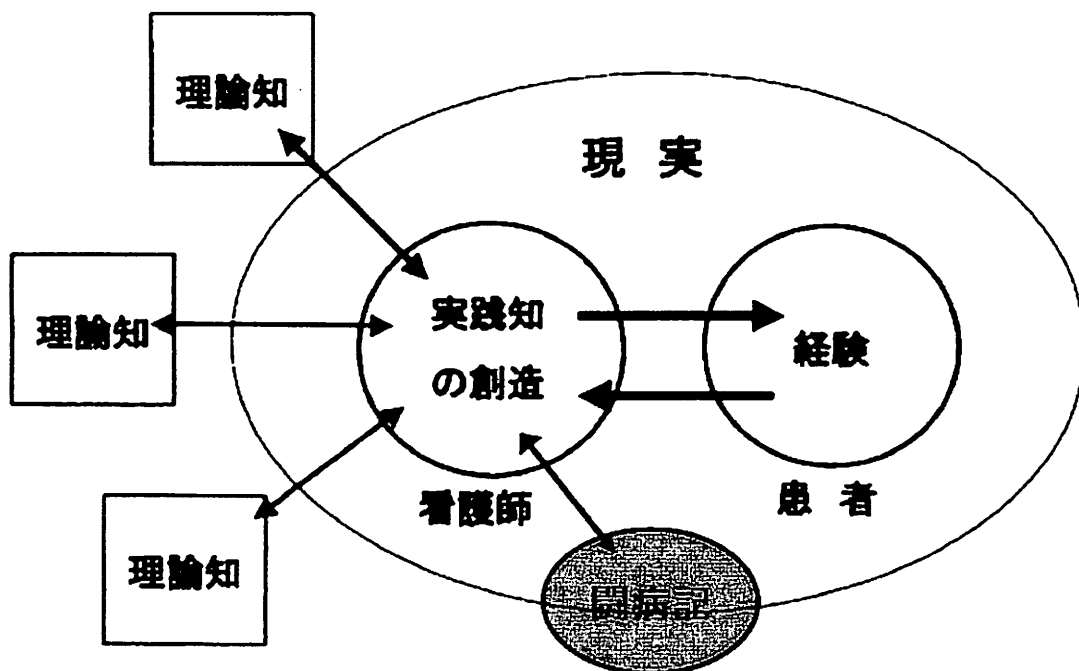


図2 経験を知に変換する「知識創造」(中山, 2004) への闘病記の位置づけ

3. テキストマイニングによる伝記分析の方法論的検討

本研究は、テキストマイニングによる闘病記を用いた伝記分析である。そもそも伝記分析という手法は、西平(1996)が集大成した研究方法であり、主に偉人の発達過程における葛藤とその克服を発達心理学理論に依拠しつつ、伝記や自伝を対象に明らかにする方法である。

大野(1998, 2008)は伝記分析の信頼性、資料の量的比較、心理学的見地からの資料的価値、伝記資料の公共性の4点から肯定的評価を行いつつ、実証研究との違いとして、解釈と蓋然性をキーワードに問題提起をしている。言い換えると、伝記分析は多様な解釈が可能な文脈での仮説生成的研究であり、実証主義による仮説検証的研究とは性格が異なる研究スタイルである。

本研究では、テキストマイニングによる伝記(闘病記)の分析により、西平が仮説生成的方法と位置づけた個別分析の方法を踏まえつつ、単語頻度分析などをはじめとするデータマイニングの手法で新しいアプローチを試みた。本研究は、古川(2001)の資料を各章および項目ごとに特徴的な単語(内容語)を特徴語

分析と対応分析により明らかにすることができた。このことにより、西平の仮説生成的手法としての伝記分析に、文字データの多変量解析という仮説検証的な役割も付加することができた。ただし、テキストマイニングの現在は、形態素分析の粗密や、類義語の定義方法、ソフトウェアの不十分さと分析のブラックボックス化の問題もあり、より透明性と再現性の高い手法になるための開発途上の方法でもあるといえる。

VI 本研究の限界

本研究は、闘病記の個別分析をテキストマイニングによって行ったという点で、他に類例を見ない新しい手法を採用した。この点で斬新さがあるとはいえ、テキストマイニングという手法の限界が同時に本研究の限界となっている。すなわち、単語の出現の頻度という分析上の基準が、その内容・意味を反映しているかどうかという根本的問題がある。テキストマイニングは、言外の意味は拾えない方法だからである。

VII まとめ

本研究は、ある統合失調症当事者の闘病記を西平(1996)による伝記分析の個別分析の方法と、テキス

トマイニングを用いて分析し、内容と構造を明らかにした。また、この闘病記がナラティブ教材として、看護師・看護学生の理論知と現実経験（臨床実習）に加えて第3の資源であり、ナラティブ教材としての意義があることを明確にした。Kleinman (1988) は「病いの経験についての患者や家族の語りを教育課程においてもっと中心的なものにすることが必要である。」(p. 337) と述べているが、これは医学教育だけでなく看護教育にもあてはまる。闘病記は病いの経験についての間接的な語りであるという特質上、看護教育におけ

る理論知と現実経験の狭間を埋める役割を果たしうる、第3の教育的な資源としての可能性を持っている（小平・伊藤, 2009; 小平・いとう, 2010b）。

謝 辞

本研究は2009年度および2010年度の聖隷クリストファー大学共同研究費の助成を受けた。資料整理に協力してくれた守下 理さんをはじめ、関係者の皆さんに感謝致します。また、貴重なご意見をいただいた査読者の方々に感謝いたします。

引用文献

- Barker P., Buchanan-Barker P. (2010): 英国にみる精神看護実践モデル: メンタルヘルスの回復についてのタイダルモデル. 萱間 真美・野田文隆 (編): 精神看護学: こころ・からだ・かかわりのプラクティス. pp. 425-433, 南江堂, 東京都.
- Bruner J. S. (1996): The culture of education. 岡本夏木, 池上貴美子, 岡村佳子, 訳 (1999): 教育という文化. 岩波書店, 東京.
- 古川奈都子 (2001): 心を病むってどういうこと?: 精神病の体験者より. ぶどう社, 東京.
- 林 知己夫 (1993): 数量化: 理論と方法. 朝倉書店, 東京.
- 広沢正孝 (2006): 統合失調症を理解する: 彼らの生きる世界と精神科リハビリテーション. 医学書院, 東京.
- いとうたけひこ, 小平朋江, 穴澤海彦, 他 (2010): タイダルモデルと浦河べてるの家: 英国と北海道から生まれた精神障害者のためのコミュニティ的人間関係援助. 和光大学現代人間学部紀要, 3, 197-207.
- 門林道子 (2005): 癌闘病記の変遷と「告知」. 死生学年報, 2005, 35-55.
- 企業教育研究会 (2008): 「こころの病気を学ぶ授業」の開発. 企業教育研究会, 千葉.
- 金 明哲 (2009): テキストデータの統計科学入門 (第1版). 岩波書店, 東京.
- Kleinman A. (1988): The illness narratives. 江口重幸, 五木田紳, 上野豪志, 訳 (1996): 病いの語り: 慢性の疾いをめぐる臨床人類学. 誠信書房, 東京.
- 小平朋江 (2003): 思春期青年期の精神障害者のデイケアでの体験の内容とその意味. 日本精神保健看護学会誌, 12(1), 85-93.
- 小平朋江 (2006): 精神障害者の居場所づくりとエンパワーメント. 井上孝代 (編): エンパワーメントのカウンセリング, 144. 川島書店, 東京.
- 小平朋江, 伊藤武彦 (2009): ナラティブ教材としての闘病記: 多様なメディアにおける精神障害者の語りの教育的活用. マクロ・カウンセリング研究, 8, 50-67.
- 小平朋江, いとうたけひこ (2010a): 回復のための資源としての語り: 精神障害者のナラティブの教材的活用. 心理教育・家族教室ネットワーク 第13回研究集会 (福岡大会) 抄録集, 52.
- 小平朋江, いとうたけひこ (2010b): 闘病記などのナラティブ教材の種類と意義: メディアの違いに着目して. 日本精神保健看護学会第20回総会・学術集会プログラム・抄録集, 106-107.
- 小平朋江, 伊藤武彦, 松上伸丈, 他 (2007): テキストマイニングによるビデオ教材の分析: 精神障害者への偏見低減教育のアカウントビリティ向上をめざして. マクロ・カウンセリング研究, 6, 16-31.
- 園方弘子 (2009): 統合失調症の self-esteem に関する研究の動向: self-esteem の選考要因と帰結を中心に. 日本精神保健看護学会誌, 18(1), 80-86.
- 森 実恵 (2006): なんとかなるよ統合失調症: がんばりすぎない闘病記. 解放出版社, 大阪.
- 永田俊彦 (2001): 寛解. 加藤正明, 他 (編): 縮刷版精神医学事典. p. 119, 弘文堂, 東京.
- 中村ユキ (2008): わが家の母はビョーキです. サンマーク出版, 東京.
- 中村ユキ (2010): わが家の母はビョーキです2 家族の絆編. サンマーク出版, 東京.
- 中山洋子 (2004): 看護の“知”の水脈を探る. 聖路加看護学会誌, 8(1), 44-49.
- 西平直喜 (1996): 生育史心理学序説: 伝記研究から自分史制作へ. 金子書房, 東京.

- 大野 久 (1998) : 伝記分析の意味と有効性 : 典型の研究. 青年心理学研究, 10, 67-71.
- 大野 久 (2008) : 伝記研究により自己をとらえる. 榎本博明, 岡田 努 (編) : 自己心理学1 自己心理学研究の歴史と方法. pp. 129-149, 金子書房, 東京.
- 大隅 昇 (2005) : 対応分析法・数量化法Ⅲ類の考え方. テキスト・マイニング研究会, 活用セミナー資料 (未公開).
- 大隅 昇 (2006) : テキスト型のデータマイニング. テキスト・マイニング研究会, 活用セミナー資料 (未公開).
- 澤木美奈子, 萩田紀博 (1995) : 補完類似度による劣化印刷文字認識. 電子情報通信学会技術研究報告. PRU, パターン認識・理解, 95(43), 101-108.
- 孫 波, いとうたけひこ, 大高庸平, 他 (2010) : ウェブサイトJPOP-VOICEにおける統合失調症の当事者の語りの特徴. 心理教育・家族教室ネットワーク第13回研究集会 (福岡大会) 抄録集, 54.
- 斎藤清二 (2003) : ナラティブ・ベイスト・メディスンとは何か. 斎藤清二・岸本寛史 (著) : ナラティブ・ベイスト・メディスンの実践. pp. 13-36, 金剛出版, 東京.
- 武井麻子 (2005) : 精神看護学ノート (第2版). 医学書院, 東京.
- 武井麻子 (2009a) : この本で伝えたいこと. 武井麻子 (編) : 系統看護学講座 専門分野Ⅱ 精神看護学1. pp. 1-14, 医学書院, 東京.
- 武井麻子 (2009b) : 精神障害者の体験. 武井麻子 (編) : 系統看護学講座 専門分野Ⅱ 精神看護学1. pp. 16-27, 医学書院, 東京.
- 和田恵美子 (2010) : がん患者の意向による治療方法等の選択を可能とする支援体制整備を目的とした, がん体験をめぐる「患者の語り」のデータベース. 厚生労働科学研究費助成金 がん臨床研究事業 平成19年度~21年度 総合研究報告書 (研究代表者 和田恵美子).
- 八木剛平 (2009) : 手記から学ぶ統合失調症 : 精神医学の原点に還る. 金原出版, 東京.
- 山口知代, 和田恵美子 (2008/2009) : 闘病記朗読会 : 闘病記読もう会 学生との交流を通して. 闘病記研究会シンポジウム予稿集. 文部科学省科学研究費「がん対策に特化した患者図書室における闘病記を用いた患者支援の実証的研究」研究班 (主任研究者 : 和田恵美子) 主催, 46.